

文学者と鎌倉という関係性

江ノ電は一五駅の短い路線ではあるが、多様性に満ちた豊饒な場所だ

黒川 類

大矢悠三子 著
▶ 江ノ電沿線の近現代史
10・31刊 A5判180頁 本体1800円
クロスカルチャー出版



鎌倉へ初めて行ったのは、東京に住むようになってから数年は経った四十六、七年前だったと思う。古寺や鶴岡八幡宮が目的ではなく、三十九歳で亡くなった高橋和巳(一九三二〜七一年)の最後の住まいが二階管理智光寺谷にあつたので、鎮魂の思いを込めて訪ねた時が最初である。その時は横須賀線経由だった。その後、吉本隆明の『実朝論』に喚起され、源実朝に関心を抱くようになり、八幡宮と寿福寺に特別な感慨を有しながら鎌倉行が続く。やがて多くの古寺に魅せられるようになり、一、二年の間隔は空乏が、かなりの頻繁に行くようになった。やはり、鎌倉行で一番多いコースは小田急の特急で片瀬江ノ島駅まで行き、片瀬海岸を散策しながら、江ノ電の江ノ島駅から乗り、途中、長谷駅で降り、散策しながら鎌倉駅方面へ向かうというものだ。海岸沿いを走る江ノ電もいいが、わたしは、江ノ島駅を発つと直ぐに路面電車となり、やがて腰越駅を過ぎて海岸沿いを走ると、遠くに江ノ島が遠望できる場所が気に入っている。

「江ノ島駅を出発すると、まもなく、(略)龍口寺前の交差点で江ノ電は大きくカーブし、藤沢市から鎌倉市へ入り、海の方へと進み、江ノ電は道路の中央を走り始めます。二色に塗り分けられた併用軌道の両側には商店や住宅が立ち並び、両脇に車を従えて走っているかのような、他の鉄道ではなかなか見られない光景が出現します。これは、江ノ電が開業当時、軌道条例(略)に基づき路面電車であったことに起因します。戦後、地方鉄道法(略)によって鉄道に変更されたため、鉄道でありながら併用軌道で走るといった特別な運行を認められているのです。」(第六章 海岸線―「江ノ電のある風景」の変貌)

所が、「大東京の風景地」という構想の下に発展してきたことが示されていく。確かに、鎌倉は大東京圏唯一の古都であることが大きな理由であるとしても、房総、三浦半島、小田原・箱根といった観光地とは、些か違う様相を湛えているのは、わたしが高橋和巳という作家に誘われるようにして鎌倉へと向かわせたことでもいえることだが、本書の中でも章立てして取り上げている文学者と鎌倉という関係性は、江ノ電を、鎌倉を魅力あるものにしていく大きな要因であると、わたしならいいたい気がする。

立原正秋(一九二六〜八〇年)という作家がいた。いまでは、あまり読まれることのない小説家かもしれない。わたしは立原を熱心に読んだわけではないが、彼が好きだったという寺の一つに、鎌倉駅から直ぐの、妙本寺がある。わたしにとってここ二十年以上、鎌倉に行けば必ず立ち寄る寺である。鎌倉文士たちのなかでも主道の作家でないことが、立原を親近なる存在として好感を持ってきたといえるかもしれない。

以前は、長谷寺も好きで、長谷駅で降りると必ず寄っていたものだが、あまりの人の多さが嫌になり、直ぐに鎌倉文学館に向かうようにしている。なによりも旧前田侯爵別邸という建物の佇まいが気に入っているからだ。

「一九七六年に鎌倉の文学を研究することを目的に、『鎌倉文学史話会』が組織され、文学館設立活動を併せて行いました。一九八一年に、鎌倉市が文学館建設について検討をはじめると、里見敦、今日出海、小林秀雄、永井龍男、清水基吉ら鎌倉文士たちは『文学史料館建設懇話会』を作り、文学館の建設に向かつて後押しをしました。そんな折、一九八三年、旧前田侯爵別邸が鎌倉市に寄贈されました。鎌倉市は、かつて川端康成や大佛次郎や、小林秀雄、吉屋信子らが暮らした長谷の地に建つ旧前田侯爵別邸を文学館として活用することになりました。一九八五年、鎌倉文学館は開館し、鎌倉ゆかりの文学者の文学資料を収集保存し、展示しています。」(第八章 鎌倉を愛した文士たち)

本書のモチーフともいえる『沿線の近現代史』のなかで、わたし自身が特に関心を持っていることに絞って援用してみた。だが、著者は「沿線に見えるいくつもの顔を、それぞれ色濃く映す地域に投影して、この沿線を描こうと考えて、そのため各章で扱ったテーマの振子の幅が若干大きいが、店には様々な売り場があるように許容していただけると幸いです。」(あとがき)と述べているが、決して本書は「テーマの振子の幅が若干大きい」とは思わない。全十章で構成した本書は、江ノ電沿線の世界を十分に描出しているといっている。それは「江ノ電は一五駅の短い路線」(同)ではあるが、多様性に満ち、しかも豊饒な場所であり、そのことがわたしたちを惹きつけてきたからだ。

(評論家)